

安全保障と天文学  
2018 年秋季年会  
2018 年 9 月 19 日 (水)

伊王野 時間になりましたので、そろそろ始めたいと思います。

本日は特別セッション「安全保障と天文学 2 声明作成に向けて」と、こちらのセッションにお集りいただき誠にありがとうございます。日本天文学会庶務理事の伊王野と申します。司会を務めさせていただきます、よろしくお願いいたします。

それでは初めに、日本学術会議 連携会員の岡村先生からごあいさつをいただきます。よろしくお願いいたします。

岡村 皆さん、このセッションにお集まりいただき誠にありがとうございます。きょうはとても大事なセッションで、時間も限られているので、だらだら話していて時間を無駄にはいけないと思い、原稿をつくってきました。

軍事につながる研究に科学者はどうかかわるのか。今緊張が高まっています。理由はご存じのとおり。防衛装備庁から競争的研究資金が出るようになり、それが年間 100 億円のレベルに達しているからです。

日本学術会議は先の大戦における反省をもとに、1950 年と 1967 年に戦争や軍事目的のための科学研究は絶対に行わないとの趣旨の声明を出しました。

それから半世紀。再び緊張の高まった昨年 3 月には、この二つの声明を継承した上で、大学などの研究機関と学協会に対して、軍事的安全保障研究とみなされる可能性のある研究に関して、審査制度やガイドラインの設定を求める声明を出しました。

日本天文学会はこれを受けて、『天文月報』で 5 回の連載を組み、本年 3 月の春季年会において特別セッションを開催しました。『天文月報』の今月号にも記事があります。

きょうのこの 2 回目の特別セッションは、会員の意見を学会声明としてまとめる重要なステップだと認識をしています。

私が気になっていることは、現在の日本の状況が、原爆開発を中心とする軍事研究へ、科学者がぞくぞくと参入した当時のアメリカの状況ととてもよく似ていることです。科学研究に予算が回ってこない、Ph.D.を取得しても職が無い、などなどです。

当時、アメリカの科学者コミュニティの頂点にいたバニーバー・ブッシュは次のように考えていたと言われています。戦争に貢献することで科学者の社会的地位を上げることができる。科学研究の資金を確保するためには、原爆をつくるのも悪いとはいえない。そういう人がアメリカ国防研究委員会の議長となり、大統領にも影響力を行使して、何千人もの研究者を軍事研究に導き、ついにマンハッタン計画に至ったのです。

防衛装備庁の安全保障技術研究推進制度では、次のようにうたわれています。防衛技術

と民生技術のボーダレス化が起きており、この制度では、先進的な民生技術についての基礎研究を公募する。

デュアルユースと言われるように、確かに技術の線引きは難しいでしょう。いろいろ理屈があるからです。しかしあえて誤解を恐れずに言えば、私は単純な話だと思っています。

ところで皆さん、今年の終戦記念日に NHK が新たに見つかった膨大な資料と証言から構成した NHK スペシャル「戦慄の記録 インパール」をご覧になった人、この中に何人ぐらいいらっしゃいますか？ 微かにいますね。では、今年の終戦記念日の「ノモンハン責任なき戦い」というのはどうでしょう？ 同じくらいですね。

戦争は、国家が国民を、心を持たない道具にして使い捨てる、まさに狂気の沙汰です。その戦争のためと初めから分かっている筋からの研究費で、研究を行うことに対して、自分の心はどう感じるのか。それが中心的な問題です。

科学者だから重い責任を持っている、という話ではなく、一人の人間としてそのことをどう考えるかという話だと私は考えています。

日常の多忙さに埋もれているとついつい通り過ぎてしまいがちです。ぜひ一度真剣に向き合う機会をつくってください。きょうは一つのよい機会だと思っています。

戦争に向かう狂気は静かに増殖します。気が付いたら抵抗できない巨大なうねりになっています。日本天文学会が見識ある声明をまとめられることを願っております。

(拍手)

伊王野 どうもありがとうございます。それでは続いて、日本天文学会会長の柴田先生から本セッションの趣旨説明をお願いします。

柴田 皆さん、こんにちは。岡村先生、すばらしいごあいさつをありがとうございます。ありがとうございました。

今、岡村先生のほうから学術会議の声明、それから天文学会の取り組みに至るまで説明していただきましたが、今の話に出てきました安全保障技術研究推進制度というのは、2015年に始まって、ついに100億円を超える規模にまで大きくなった。それを受けて学術会議が声明を発表したのは去年の3月24日。天文学会ではその3カ月後の代議員総会で、当時学術会議の会員であった須藤靖さんがすばらしい講演をしてくださって、天文学会でもこれは真摯に取り組もうということになり、『天文月報』で連載記事をつくり、今年の春の年会の特別セッションで「安全保障と天文学」を初めて議論したわけです。

そのときに私は将来に光が見えたのですが、皆さん若い方も含めて、これは大事だから

今後も議論を続けましょう、ということになりました。

それで今回のセッションに至るわけです。その間、国内外のメディアも注目していただき、きょうもいくつかの新聞、NHK 等入っていますが、春のセッションは毎日新聞、読売新聞で報道され、なんと国際誌の『Nature』のエディトリアルの記事まで出ました。

ただし、そこで間違った報道がされまして、日本の天文学会はこの軍事研究に賛成しているというとんでもない記事が出ました。それは『Nature』が直接ここに取材をせず日本に出た新聞記事のコピー、なにかそういうものを基にしたということで、私たちは当然のことながら抗議をしました。そしたらちゃんと修正記事を出してくれまして、それで「We apologize …」と謝罪までしていただきました。これは今週中に皆さんにその経緯の簡単なまとめをメールでお送りし、ホームページで発信したいと思います。

きょうは、今も岡村先生が言ってくださいましたように、天文学会としての声明をこれから皆さんと議論して（議論することが非常に大事なのですが）、最終的には発信しようということです。来年の 3 月に声明の公表を目標に進みたい。これは非常に厳格なタイムリミットです。なぜかと言いますと、このあと私は会長を辞めますから。（笑）

私の会長任期中にまとめたいということで。これはもちろん確定したわけではなく、あとで皆さんともう一度議論をしまして、こういう方向性でどうでしょうかという議論はしたいと思います。

きょうは、今も申しましたけれども、基本的にはメディアの方々、記者の方々に公開、公聴可としています。これは基本的に天文学会のいろいろな発表等々と同じやり方です。今回はさらに、『Nature』記事の問題もありましたので、特別セッション後に特別に記者の方向けに記者会見の場を設けました。姫路駅前に移りまして、そこでの質疑応答のやりとりが天文学会の正式な対応となります。それをメディアの方々にご理解ください。ここは傍聴していただくのですが、一部の切り取り報道は控えていただき、全体をみて、天文学会はこういう取り組みをしているということが一番重要なことですので、そういうことを発信していただく。もちろん多様な意見があるということを踏まえて、真摯に議論をしていると報道していただきたいと思います。

テレビカメラを入れてもいいかとの問い合わせがきていますので、これに対しては特別セッションの撮影の際には、個人の発言が同定されるような撮影は控えていただきます。これは一般の市民講演会とか見学会とか、そういうときの取材と基本的には一緒ですね。本人の同意がない限りは顔を出さないと。ですから、きょうはカメラもありますし、記者

の方もたくさんおられますが、天文学会の会員の皆さんは、決して皆さんの発言が、あるいは皆さんの存在が同定されるような撮影法の心配はありませんので、心配なく自由に活発に質疑応答をよろしく願いいたします。

これからこういうことでコミュニティの意見というのをお聞きしたいと思いますが、以上よろしく願います。

(拍手)

伊王野 柴田先生、どうもありがとうございました。それではコミュニティの意見として、最初に京都大学博士課程2年の谷本さん、よろしく願いいたします。

谷本 京都大学2年の谷本です。本日はコミュニティの意見の初めの者として、今年度(天文・天体物理若手の)夏の学校で行った「天文学会と安全保障」について報告させていただきます。

先ほど説明がありましように、私たち天文学会は、春季の天文学会でも特別セッション「天文学会と安全保障」を行いました。その際も、会長の柴田さんからまずこのように概要の説明がなされました。その後、日本学術会議の前会員である須藤さんから学術研究と安全保障についての説明がなされました。時間の都合上その部分については割愛しますが、その後、コミュニティの意見や総合討論などを行いました。

その後、この特別セッションの議事録などを世話人たちで確認を行いました。そしてさまざまな立場から非常に多様な意見が表明されたのは大変すばらしいことであるという意見になりましたが、若手研究者からの意見が十分ではないのではないかという指摘を受けました。そこで私たち世話人は、若手研究者からの意見収集を行いたいと考えました。

多くの大学院生が参加する夏の学校で、今年度議論を行いました。まずは世話人の私から、防衛省の安全保障技術研究推進制度を含む概要の説明を行いました。この際、今まで行われた『天文月報』や春季天文学会での議論についての情報共有を十分に行った上で議論を行いました。

その後、6名ごとのグループに分かれていただいて、グループごとにディスカッションを行っていただきました。また、安全保障技術研究推進制度の是非についてのアンケートをこの際に実施しました。

その後、全体討論を行うというような流れで、夏の学校では天文学と安全保障について、若手研究者のみで議論を行いました。

この場ではこのアンケートの結果について報告させていただきます。アンケートの内容

は「安全保障技術研究推進制度の是非について」です。選択肢は「賛成・反対・保留」の3つで取らせていただきました。回答数は138件。ちなみに若手の会の会員数が約400名程度ですので、回答率はだいたい3分の1程度となっております。

またアンケートについて先に補足させていただきます。今回のアンケートは賛否の数から若手の意見を一つにまとめるというような意図ではありません。また、なぜその選択肢を選んだのかという理由についても必ず答えていただくように設定しました。また、回答者の多くは、夏の学校の参加者は大部分が修士の学生ですので、回答者の多くは修士の学生となっております。さらに結果はリアルタイムで共有するようにしてアンケートを行いました。

アンケートの結果がこちらになります。

安全保障技術研究推進制度に賛成が56.5%。反対が29%。保留が14.5%。以上の結果になりました。ここからそれぞれの立場の理由について詳細に述べてきます。

まずは賛成意見について説明します。

賛成意見は主に次の二つでした。一つ目が、文科省から貰う予算と防衛省から貰う予算の違いが感じられないというような意見がありました。具体的には安全保障技術研究推進制度の場合、研究内容や成果の公表は制限しないと明記されています。また文科省から貰う科研費を使用した研究だとしても軍事転用され得るとというような観点が指摘されました。二つ目は、若手研究者の研究費関連の問題が指摘されました。現状、若手研究者の研究費が多くないという指摘や、なので研究資金を獲得する機会が増えるのであればこのような制度に申し込んでよい、また資金的な問題のために現状では賛成せざるを得ない、というような賛成意見が挙げられました。

次に反対意見について紹介します。

反対意見についても主に二つの理由が挙げられました。一つ目はこちらで、科学技術と軍事技術は独立するべきである、というような意見が多くみられました。われわれの研究が軍事技術に転用されること自体に抵抗がある、であるとか、お金を獲得するために防衛省から予算が貰いやすいような研究を行うなど、研究に対する動機が歪められる可能性がある、などが指摘されました。反対意見の二つ目として挙げられたのが、科学者のみではコントロール出来ない、という点でした。今回の制度では、私たち科学者の裁量を超えた部分のコントロールが出来ない、というような問題点があり、現状の政権や防衛省などの意向のみで軍事転用される可能性があるので反対である、というような意見が挙げられま

した。

最期に保留意見についても紹介します。

保留意見のメインの理由はこれですが、現状では判断が出来ないというものでした。現状ではまだ議論が十分ではないので判断が出来ない、といった意見がみられました。また、この制度が制定されてからまだ2年か3年しかたっていないので、今後研究内容が制限される可能性が否定できない、という点についても指摘を受けました。そのほか保留意見としてあげられたのが、防衛省から予算を貰うことによって文科省から貰う予算、科研費が減る可能性があるのではないか、という意見や、現状ではやはり不明瞭な点が多い、今後も天文学会で議論を続けていく必要がある、などの意見が挙げられました。

最期にまとめについて説明します。今回私たちは天文学の「天文・天体物理若手夏の学校」において天文学と安全保障について若手研究者のみで議論を行いました。賛成意見としては主に二つのものが挙げられて、一つ目は、文科省から貰う予算と防衛省から貰う予算の違いが明確ではないという点。また、研究資金を獲得する機会が増えるのであれば、賛成しても、応募してもいいのではないかという意見が挙げられました。反対意見としては、こちらも主に二つが挙げられて、科学技術と軍事技術は独立するべきである。また、この制度の場合、私たち科学者のみではコントロールが出来ない、という反対意見が挙げられました。最後に保留意見として、現状では判断出来ない、今後も私たちは議論を継続していく必要がある、といった指摘がされました。

私からの発表は以上です。

(拍手)

伊王野 どうもありがとうございました。それでは谷本さんの講演に対して、質問およびコメント等がありましたらお願いいたします。

A 賛成意見のほうは、出していただいたのはかなり、なんていうか、消極的賛成といいますが、悪い制度ではないのではないかという意見だったと思うのですが、もっと積極的にというか、防衛には協力するべきだとか、そういう意見はあったんですか。

谷本 はい、少数ではありますが、そういった意見もありました。

伊王野 ほかにいかがでしょうか。

B 保留意見があるのですが、今後議論を継続する必要があるということで、若手のなかで今後継続していこうというような雰囲気はあるのか。来年以降もこの学校などで、これを議題にしたなにかセッション的なことはあるのでしょうか。

谷本 来年の夏の学校でやるかという点について先にお答えしますと、柴田さんの任期が来年の6月までですので、そのタイミング、やるのだったらそれよりも早くやったほうがいいかなと思っています。議論した際には、もっと継続的に議論すべきという意見はでたのですが、具体的にまだなにか若手の中で議論する機会を設けているというわけではありません。

伊王野 もう少し時間はありますけれどもいかがでしょうか。

C 若手のほうでいろいろな意見があったと思いますが、アンケートという形で書かれた文書はそういうものであると思いますが、具体的な話し合いとかでなにかピックアップできるような内容とかは特にないでしょうか。やはりいろいろな声の中で、大きく声を出しながら、これはこうだとか、あるいは反対だとかいうのは議論になったようなことがあったら、それをちょっと教えていただきたいかと思えますけれども。

谷本 基本的には今回紹介させていただいた意見がメインで、というのはアンケートを取ったあとに、アンケートと同じ意見を全体討論で述べていただいたので、基本的には今回示している意見と全体討論で出た意見に大きな違いはないと思います。

D よろしいですか。ちょっとこの本論とは少し外れるのですが、今、若手の会というのは、実質的には学生（学部学生のことではなく大学院生）が代表団体になっていますよね。

谷本 はい。

D 実はですね、僕は結構、現状、本当に研究とかで苦労している若手のポスドクとか若手の助教とかの意見を集約する団体が、今、実は天文学会に存在しないんですね。今後議論を深めるというのであれば、そういうところにも対象を広げたほうが、よりフェアで、かつ若手のより統一した意見というのになるのではないかと、ちょっとコメントさせていただきたいと思えます。

谷本 分かりました。ありがとうございます。

E アンケート結果が出たときの、会場の空気を知りたいんですけど。（笑）

わりと皆さん、おおむね予想どおりだなというような感じだったのか、ああ意外だなというような感じだったのか、あるいはなんか、どんな感じでしたか。

谷本 反応としては前者に近かったと記憶しています。なので、若手の方は賛成が多いんじゃないかみたいなことを、やる前から私は聞いていたので、その前評判どおりの結果になったのではないかなという雰囲気を私は感じました。



伊王野 では最後の質問。

F 賛成者のほうが多いというのは、結構衝撃的な感じだったのですが、パッと聞いた時に、軍事政権に賛成ですか、反対ですかと言われれば、まあ反対ですと普通はなる気がするのに対して、その声になっていたのは、その議論のなかで、最初にアンケートを取ってないと思うので分からないのですが、最初のファーストインプレッション的なもので賛成、反対であったものが議論のなかで変わっていった賛成が増えたのか、それとも最初から結構みんな若手というか学生の人たちは、こういう制度に対してあまり違和感がなくて、別にお金が貰えれば、まさに先ほどの賛成意見のような感じで、それだって別に受け入れますよというのが最初からあるのか、そのあたりはどうなのでしょう。

谷本 すみません、その部分についてはちょっと正確には分からないという回答になります。グループディスカッションが終わったあとにこのアンケートを実施しましたので、もともとどういったイメージを持っていたかという部分についてはちょっと現状だと分かりません。ただし、グループディスカッション後にアンケートを取らせていただいて、そのあと総合討論を行いました。その際、総合討論でこのような意見だったのですが、あげられた意見によって賛成と反対の数が多少変わるといったことはみられました。

伊王野 それでは谷本さん、どうもありがとうございました。

(拍手)

続いては東京大学教授の戸谷先生、よろしくお願いいたします。

戸谷 こういうタイトルで話をいたします。つまり私は学術会議の声明にどちらかというところと批判的な立場で話をしますが、そもそも私は好き好んでこんなところで講演したくないんですね。正直言って、こんな気乗りのしない講演は私初めてです。この問題はどうしても政治的になるんですよね。なので、私は多様な意見があるし、それは当然だと思っているので、それ以上自分の意見をあれこれ強く主張するという気はさらさらなかったし、今でもないのです。ただ私が気になったのは、学術会議が主導する議論は、どうも意見の多様性を認めず、特定の見解をすべての研究者に押しつけている印象を私は実は持っていて、それに対しては非常に違和感というか、反発を持っています。

そこで学会の意見窓口ができたときに、こっそりメールを出しておいたんですね。それ以上私は表にでる気はまったくなかったんですけど、私にとって不服だったのはこのメールが2件しかなかった。これは私にとっての生涯最大の過ち。結局、柴田会長から今回このような依頼がくるというわけで、下手に意見を言うと、こういう羽目になるという

ことで、皆さんやっぱり意見は言わないほうがいいですね。（笑）

冗談はともかくとして、その際、柴田さんからの依頼メールに気になる一言があって、「戸谷君の率直な意見・提案が若者たちにどんな意見でも自由に議論する雰囲気を作ってくれると思うのでよろしくお願いします」と。これは要するに若者には意見がしづらい雰囲気が今あるのではないかということなんですね。これは私も実は気になっていて、私も実はこれは同感です。若者はちょっと意見が言いづらいのではないかと。

私の周囲に少し聞いてみても、たとえば「多様な意見を認めないような雰囲気があるというのが残念である」と、そういう若手の意見がありました。

なぜこんなことになっているのかというと、私の考えでは、まず学術会議という非常に権威ある団体が、既に軍事研究はしないという一面的な結論を出してしまっています。結論ありきで議論が進んでいるんですね。

さらに天文学会でこの議論をリードして、発言しているのは学術会議関係者を含む、いわゆる「偉い先生たち」が非常に多いと。もちろん偉い先生でも個人の意見を言うのはもちろん自由ですが、学術会議の権威を背景に、学術会議声明に合致する形でとにかく学会の意見をなんとかまとめようという意図がありありで、目に余る、というケースが私はちらほらあると。誰とは言いません。

このようななかで、若手が反対意見を述べにくいのは当然だと思いますね。なので、私もきょうは、私も今の立場だからなんとか出てこられましたけれども、私が助教とかポストドクだったら絶対出てこないです。あとで須藤さんから絶対怒られるに決まっているんです。（笑）

きょうは覚悟を決めて出てきました。

いずれにしても、私は今の学会の雰囲気は健全な議論が進んでいるとは思えないです。これは偉い先生方には一度、この点をもう 1 回考えてみてほしいですね。偉い人には、それがわからんのです。（笑）

本題に入りますけれどね。安全保障に関する学術会議声明を見直すと、最初は昭和 25 年の声明は文書として、「戦争を目的とする科学の研究は行わない」と。私はこれについてはそんなに異論はないんですね。別に誰だって戦争は好きでいたい人はいないと思うので。

ただ、次の昭和 42 年の声明から、なんかちょっとおかしいことになっていて、声明の本文はまったく前の声明と同じ、「戦争を目的とする研究は行わない」というものなんで

すけれど、なぜか突然タイトルが「軍事目的のための科学研究は行わない」というタイトルになっています。これ、本文中に軍事とはどこにも出てこないんですね。なんでこんなことになっているのか私には分かりませんが、たぶん「軍事研究＝戦争目的」だ、という考えが前提なのだと思いますけれどね。以後このタイトルの軍事目的、軍事研究の禁止と受け取られて、世間でも一人歩きしている感じがします。

「軍事研究を行わない」という声明に関して、私は非常に社会的なコンセンサスが得られているとは正直言って思えないですね。学術会議声明に対する世間の反応をみても、あるいは軍事に関するいろいろな政治問題の意見分布をみても。むしろこの考え方はかなり、どちらかというところむしろ平均からみたらエクストリームな考え方という気はします。

戦争と平和だったら、誰だって平和がいいと、私も平和がいいと思うのですが、難しいのは、そもそも「軍事＝戦争」であって、それは平和の敵なんだと。ここはたぶん意見が分かれるところで、軍事と「戦争と平和」はそう単純な関係ではないと思っている人がかなりいて、たとえば軍事というのが戦争の惨禍を生み出すのは、これは当然なわけですが、一方で、世界の歴史、洋の東西を問わずみても、平和を目指して維持してきた、これは世界の歴史をみても、結局それは背景に強大な軍事力があつた。これは現実。今の世界だって平和を維持されているのはどっかの国の強大な軍事力であると。僕はいいか悪いかの話をしているのではなくて、それが現実であるというのは間違いないと思います。

そういう現実の世界で、たとえばある国が軍事研究を禁止すれば、それは人類の平和と幸福につながるのかというと、逆に世界の平和が損なわれる可能性だっていくらでも考えられると思いますね。たとえば実際そうやって軍事研究を禁止しようと禁止してしまう国は、平和的で民主的な、たぶんいい国なんですね。そういう国がどんどん軍事を止めてしまつて、でも世の中には独裁国家が、危なっかしい国がいっぱいあつて、そういう国がどんどん軍事を増強していると。そういうようにトレンドがいつて、それが世界の、人類の幸福につながるのかどうかを私はかなり疑問に感じます。

そもそも日本のケースを考えても、日本は安全保障をアメリカの軍事力に完全に依存している状態。これは多くの人が認めることですよね。しかもそのための日米同盟というのを支持している国民の割合はかなり高い。要するにこれは軍事力を認めて、軍事力に依存しているわけですね。そういう国が平和主義の観点から「軍事研究はしません」と言ったところで、正直いって私は世界から尊敬されるとはちょっと思えないですね。

たとえば軍事研究を行ってはいけないなにか明確な根拠があるだろうか。よくそうい

う議論ででてくるのは、たとえば生命倫理、研究倫理になぞらえて、倫理の観点から軍事研究を規制すべきだという意見があるのですが、私はそれには賛同しないですね。なぜかという、今言ったとおり、とにかく人類の幸福という究極の目標を掲げても、軍事がプラスかマイナスかはかなり判断が難しい。これは歴史的にみてもたぶんそうだと思います。現実の世界だとそういうことになっている。なので、これが軍事の問題の難しさだと思いますね。

私はあとこの問題は倫理の問題というよりか、政治の問題だと思いますね。実は軍事にどう向き合うかという話なので、これはたぶん憲法 9 条だとか自衛隊の問題もいろいろと議論されていますよね。こういう政治的な問題と基本的に本質は同じだと私は思っている。

政治の問題である以上、それはさまざまな意見が、たとえば憲法 9 条などの問題、さまざまな立場の方がいらっしゃるわけですね。私はさまざまな意見はさまざまな意見として尊重するというのが正しい姿であると思います。

実際今回この問題に関してなかなか天文学会の人々の発言がみられないというのも、一番大きな理由はやはりどうも政治性を感じられるからと。私自身もこういうところであまりしゃべりたくないのは正直そういうことなんです。やはり政治の問題になると、どうしても自分の政治的見解を大っぴらに言わないというのがある種われわれ大人のたしなみというところでもあるんですね。これまで発言している人が、たしなみがないと言っているわけではないんですけど。(笑)

いずれにしてもそういう学術団体がこのような政治的な問題について一面的な結論を出して、すべての人をそれに従わせようとするのは、私の感覚では「ありえない」。「ドン引き」というものですね。

また、非公開研究だから規制すべきという話も議論も出ますが、軍事研究と非公開研究はそもそも一対一対応ではないですし、例の防衛省の助成は公開可能だし、あるいは民間企業なんかの共同研究でも当然企業機密の問題があるわけですね。

私はこれを問題にするのであれば、とにかく軍事研究の話は置いておいて、一般論として非公開研究の是非ということについて別に議論を立ち上げるのが筋だと思います。特に私は軍事研究に関しては、するかしないか、軍事研究がいいか悪いかも含めて、多様な意見があるというのが現状であって、私はそれが健全だと思います。

これは非常に難しいし、大事な問題なので、大事な問題だからこそ、私は安易に一つの

結論を出すべきではないと思っています。少なくとも、たかが学術会議ごときにポンと正解が出せるような生やさしい問題であるとは私は思いません。むしろ安易に一つの結論を出して、すべての人をそれに強制するというような動きこそ、私は戒めるべきではないかと思っています。

とりあえずここまでの結論として、私は「軍事研究を行わない」という考えをすべての研究者に押しつけるのはあまりにも無理な話だと思えますね。

したがって、学術会議声明の問題点はなにか。これは日本の学術界のトップに君臨する権威のある団体が、多様な意見の存在を無視して「軍事研究はしない」という極めて一面的な結論を出してしまったこと、これは問題だと思います。それどころか、平成 29 年、去年の声明では、これを踏襲すると宣言した上で、各大学や団体にも審査制度をつくることを要求しているわけですね。これは要するに、すべての研究者に対して「軍事研究の禁止」というのを実効的に強制する意思の表明というように私は受け取りました。マスコミなんかの議論はたぶんそういうように多くの世間がそう受け取っているのではないかと思いますね。

これは非常に危険なこと、あぶないことであると私は思っていて、これはいろいろすでに報道されているとおり、北大でこのようなケースがありました。北大は学術会議声明を受けて、大学として防衛省の研究助成の辞退を決定しました。北大ではそれまでこの助成を受けていた研究者がいました。でもこれによって、その研究者は継続してこの助成を受ける自由を失ったわけです。私はこのニュースを見たときに、すごく恐ろしいというか、とんでもないことが起きていると正直思いました。

防衛省の研究助成について賛否両論があるのは分かりますけれどね。ただ基本的な事実として、これはまず応募したい人が出ず。出たくない人に出せと誰も強制していないわけです。ところが学術会議がやっていることはなにかというと、すべての研究者に対してこれは出してはいかんと強制してわけです。はっきり言わせてもらいますと、政府や防衛省よりも学術会議がやっていることのほうがよほど常軌を逸していると思えますね。はっきり言えば、学術会議は思い上がっているのではないか。自分の意見を下々に押しつけるのではなく、意見の多様性や研究者の自由を保護することこそが、本来、学術会議がやることだと私は思います。また各大学や研究機関には、学術会議の圧力に屈することなく、研究者の自由と権利を守ってもらいたい、私はそう思っています。

戦前の裏返しという言葉があります。これはとある有名な人の文章ですが、「国家がほ

ろんだ反動として日本じゅうに、自国嫌悪の気分がおこった。その気分がいまもつづいていて、戦後日本的な社会主義願望やコミュニズム志向になったようにおもえる。そういうイデオロギーによる戦後の日本観も信じられなかった。単に戦前の裏返しにすぎないとおもったのである。」

これは誰の文章か分かる方います？

G 司馬遼太郎。

戸谷 はい、あの、この人知ってたとか、あるんですよ。これは司馬遼太郎の「街道をゆく・神田界限」。非常にマイナーなものからとってきたんですけど。

私この文章で、たとえば「軍事を一切否定する、戦後日本的な平和主義というイデオロギー」と読み替えてもほぼ意味が通じると私は思っています、個人でどのようなイデオロギーを持とうがそれは勝手なのですが、一つのイデオロギーをすべての研究者に押し付けて、さらに従わない者は審査制度を使って取り締まるとするのは、私には立派な「戦前の裏返し」。

そもそも平和主義をイデオロギーというのはけしからんという人もいるかもしれませんが、実際皆さんご存じのとおり、この問題はシニアの人と若手で全然意見がガラッと変わっています。それはやっぱりシニアの人たちに多く共有されているイデオロギーであるということもある一つの証左ではないかと私は思っています。

そこで私は、そもそも学術会議とはいったい何者なのかと改めて考えてみたのですが、これホームページによると「新たな会員の選出は、現在の会員が候補者を推薦し、学術会議自らが選考する」ということになっています。つまり学術会議の外の間人は学術会議の新しいメンバーとか選定や運営になにも関われないんですね。要するに、一部の偉いお年寄りの「仲良しクラブ」にすぎないのではないかと。これ事実だと思いますね。われわれ一般の研究者の民主的な代表とは言いがたいですね。もちろん国民や市民の代表でもないです。よく学術会議は「学者の国会」と形容されますが、これまったく間違いですね。国会というのは選挙で民主的に選ばれた人たちが集まる場所なので、学術会議はむしろその対極にあると。たとえば学者をスポーツ選手にたとえるのであれば、学術会議というのはたとえば日本ボクシング連盟だとか、日本体操協会とか、そういうものに対応するといったほうが正しいと思います。

そのような非民主的で閉鎖的な団体が日本で最高の権威を持っていて、ひとたび声明を出せば大学や学会も萎縮し、忖度して、その結果、北大の研究者個人の自由が侵害されて

しまった。これは日本の学術コミュニティにおける深刻な問題なのではないかと私は思いますけれどね。だから軍事研究がどうのこうのと議論する前に、この問題のほうを早急に議論するべきだと私は思います。

それだけではない、たぶん安全保障問題だけではないんですね。たとえば、皆さんご存じとおり、大規模な科学プロジェクトの選定は学術会議が取り仕切っていますね。たとえば非民主的な「私的クラブ」が、ボトムアップを旨とする基礎科学プロジェクトに関する重大な決定を行っていいのかと。私これは非常に疑問に思います。もちろん大プロジェクトのどれを取るかと、そういった大きなトップレベルの決定は、それはもちろんトップダウンの決定はどこかで必要でしょうけれども、その決定をする人たちをあくまでボトムアップで選出されるべきと。これが民主的なコミュニティの僕は常識だと思いますけれども、残念ながら今の日本のコミュニティはそうになっていないと思いますね。

たとえばプロジェクト計画を学術会議に認めてもらわないといけない立場の人が、一方でこの軍事研究に関する声明に関しては実は反対の意見を持っていると。そこで堂々と学術会議を批判できるかという、たぶんできないですよ。自分のプロジェクトを潰される、学術会議を怒らせて、プロジェクトを潰されたらどうしようと思うわけですから。これは非常に重要なポイントで、学術会議を批判するという事は非常に勇気がいるわけです。私も今、だからこの講演をするうえで、もうかなり覚悟を決めて、なかばやけくそで、もう泣きそうな気持ちでやっているんですけど。頭を坊主にしたことは特に関係ありません。（笑）

実際、日本政府を批判するのは簡単ですよ。これはマスコミでも一般市民でも毎日のように日本政府を批判しているじゃないですか。それは民主的に選ばれているからですね。学術会議というのは非民主的な組織でありながら、強大な権威・権限を持っている。これが非常に問題で、こういう組織は非常にやっかいで、なかなか批判しづらいですよ。たとえば中国の人民が習近平を批判できるかというとなかなかできないわけで、それと僕同じだと思います。

というわけで、私は学術会議に関していろいろと、もともと僕はあまり考えていなかったのですが、今回柴田さんに講演を頼まれて、あれこれ考えているうち、考えれば考えるほど学術会議というのはけしからん組織だというのが思ってきたので、私は一研究者として学術会議に次の三点を求めたい。

まず、「軍事目的の科学研究は行わない」という声明の文言は直ちに撤回してほしいと

思います。これはやはり大事な問題なので、こんな大事な問題を学術会議なんか勝手に決められたらたまったもんじゃないと思いますね。

また、非民主的な団体であるにもかかわらず、すべての研究者に特定の見解を押しつけて、自由を奪いかねない状況をつくったことについては、真摯に反省してほしい。反省しろと言いたいですね。

最後に開かれた民主的な組織に生まれ変わるための、自己改革の道筋を早急に示すこと。

学術会議がこのような対応をしない限り、私はこの問題に関して学術会議の言うことに耳を傾けるつもりはないです。また民主化に向けて自己改革する意思や能力がもし学術会議にないのであれば、それはもう学術会議をつぶすしかないと思いますね。それでつぶして、開かれた新しい枠組みをボトムアップによってみんなで作るとというのが正しいと思います。

私はこういう講演内容をまとめてから気が付いたのですが、このセッション、実は学術会議と共催なんですよ。（笑）

ありがとうございました。

（拍手）

違う違う、悪いことしちゃった。これで終わりじゃないですよ。すいません、もうちょっと続きます。

それで日本本天文学会としてどうするかっていうのを一会員の意見を言いますが、天文学会として声明を出すかっていうのでこのセッションが行われているかと思いますが、とりあえず私は今言った理由で、とにかく学術会議声明を無批判に支持する声明というのは絶対に反対ですね。またそれを前提として審査制度とかガイドラインとかそういう窮屈なものをつくるのも私は反対です。

むしろ私の希望としては、今言った学術会議声明もしくは学術会議そのものの問題点に関して批判する声明を私は出してほしい。ただもちろん私の意見が多数派とは限らないでしょうから、そうであっても最低限こういう批判意見があったということは声明に盛り込んでほしい。やはり学会の出す声明というのは、多様な意見を盛り込む。要するに、一つの意見を定めるのではなく、多様な意見を盛り込んだものであるというのが、それが正しいと私は思います。

そもそも声明を出す必要があるのかというところから考えてみたほうがいいと思います。たとえば、実はほかの学会などではこのような議論はほとんど進んでないという話ですよ



ね。これはどうしてかという、私が思うに、学術会議のやっていることにみんなついていけないのですけれど、かといって表だって反対するというのも、学術会議だし、反対するのも怖いので、とりあえずみんな様子を見ながら黙っているのが実状だと私は思います。これはある意味大人の対応ではないかと思えます。天文学会の皆さんご承知のとおり、世間でももっとも大人ではない人たちが集まっているので、こうやってシンポジウムをやっている。

ほかの学会に倣って、もう声明なんか出さずに、学術会議を放置するというのもそれはそれでアクションとしていいのではないかと。つまり要は、学術会議がなにか変な声明を出してもそんなものは無視していいんだよ、というのを日本の研究者全体で共有するということは、僕は学術会議の権威を弱めるという意味で非常にいい手ではないかと私は思いますね。

もうひとつ学会の議論を進めるのに、多数決で無理やり進めることは、それはちょっと心配ですね。つまり「軍事研究は禁止」という意見が多数派であれば、すべての人に対して軍事研究の禁止を強制していいのだろうか。これは非常に危険だと私は思っていて、つまり「個人の自由に任せる」というオプションがあるわけですね。そういう問題に対して、多数決で一面的な結論を出して、すべての人に同じ行動を求めるということは、私は一般論として絶対避けるべきだと思いますね。これは非常に危険であると。実際、歴史的に見ても、たとえば日本とかドイツでファシズムが出てきたのは、あれはみんな民主的な政体のなかからファシズムが生まれてきた、たぶんこのようなプロセスから生まれてきたと私は理解していますけれど、ある種こういうのはファシズムの始まりという危険性がある。多数決ではなく、こういうのは全会一致で出すというのが絶対あるべきだと思いますね。全会一致ができなければ出さなきゃいいんです。もちろん学会執行部やワーキンググループだけで採択を執行するのは論外です。

さらに全会員に対する、僕どうしても思うのは、先ほどの谷本さんの講演で、若手の会がちゃんと会員に向かってアンケートをやっていますよね。私は大変立派なことだと思います。なぜ天文学会でそれをやらないのか、私は不思議でならない。偉い先生が吠えてばかりのシンポジウムを何回もやるよりも、全会員にちゃんとアンケートをやったらいんじゃないですか。私は若手の会を見習ったほうがいいのではないかと思っています。

とにかく全会一致にならないのであれば無理に声明を出さなくてもいいと思うし、先ほどの話を聞いていると、会長の任期が来年 3 月だからそれまでに声明を出すというのは、

それはいかがなものとは私はちょっと思います。

ここでちょっと私は皆さんにリマインドしたいのは、去年の学術会議声明の採択の経緯というのがあって、これはいろいろと報道されていますけれど、声明案の作成委員会は、重要な声明なので総会での採択を求めていたんですね。ところが学術会議では総会を通さずに幹事会で、ある種強引に決議してしまいました。そのとき幹事会でどういう意見が出たか。「総会で紛糾してまとまらない恐れがある」と。紛糾してまとまらない恐れがあるようなものは、そもそも採択しないと判断するのが良識であると思います。このへんは学術会議という組織の体質がでているのではないかと私は思います。天文学会ではこのような愚行はやってほしくないと感じます。

最後に、これ最後のスライドですけれど、全会一致で出せそうな声明というのはあり得るのかということですが、私はたぶんあるとすればこれがたぶん唯一の解だと私は思っていて、学者のコミュニティとして、先の大戦の戦争の反省をするのであれば、それはたぶん「軍事研究をしたくない人まで動員された」というのは、これは絶対反省すべきことである。それだったら私は「学問の自由」を宣言して、「軍事研究をしたくない人に強制的に行わせるようなことは絶対学会として拒否する」と。こういう声明だったらたぶん反対は出ないと思いますし、もちろん私も反対はしません。逆にそうじゃなくて、すべての人に無理やり「軍事研究の禁止」を押しつけるので、話がややこしくなるというのが私の理解です。

以上です。ありがとうございました。

(拍手)

伊王野 このあと総合討論の時間もありませんけれども、ここで質問をいくつか受け付けたいと思います。

H 学術会議というのは私的な団体でというようにおっしゃっていたのですが、この学術会議というのは日本の法律で位置付けられて、内閣府だかなんだかに、今ちょっと権威を失ってですね、なんかあのへんにぶら下がっていて、メンバーの人間は内閣総理大臣によって行われている組織であるというようなことになっているのですが、そのへんの規定をあえて今ここでおっしゃらずに、すごく私的な寄り合い団体が、なんか歴史的経緯でこういう組織をつくって、…?…をしているという表現をされた意図を教えてくださいたいのですが。

戸谷 私はそこまで言ってない。ただまず研究者の民主的な代表ではないというのが私

の言いたかったことですね。

H なるほど。というのは、分かりました。ありがとうございます。以上です。

I すみません、コメントだけなんですけれど。まず私、すごくご意見に賛成します。正直びっくりしました。予想と全然違って、…?…。ということと、あともう一個コメントは、私、△△大学なんですけれど、△△大学についてもまったく同じ。先ほどの北海道と同じ状況で、実質われわれ、ある意味強制的に出せなくなった。しかも僕、一応教授なんですけれど、僕の意見とか全然、もっと偉い先生が決めたことで…?…。以上です。

柴田 勇気をもって、講演いただきましてありがとうございます。こういうエクストリームな意見も天文学会では共有して議論すると。

戸谷 いや、人に対して合わないからエクストリームと言うのは失礼だと思いますが。  
(笑)

柴田 そういう雰囲気がつくるというのが。

戸谷 若者から見ればシニアの人がエクストリームだと。

柴田 私の会長としての一番重要な責任だと思います。声明をまとめる方向に向けて皆さんと議論しましょうと言いましたのは、まさにこういう議論を通して、いろいろな大事なことをみんなに考えてもらおうと。これ議論しなかったら考えないんですよ。だから僕はね、最後のね、戸谷君の言うこと、いろいろなところへんはね、部分的には賛同できるところもあるけれども、なにもしないという結論に関して僕はまったく反対。これはわれわれ、戸谷君も教授になったから分かるでしょ。責任があるわけですね。次世代に対する責任。これはやっぱり黙っていてはできない。ですからどんな須藤さんとバトルしても構いませんから。

戸谷 それはできれば避けたいです。(笑)

柴田 いやいや、それを嫌がるのが一番危険なんです。それを言いたい。

J 一若手の意見ですと、非常に、戸谷さんの発言には共感するところがあって、総合討論で言おうと思っていたことが言われてしまったところがあるのですが。あと日本学術会議、先ほど、そのような団体について発言されて…?…調べるような状況で、正直、たぶん僕が知らないだけかもしれないが、あんまり学術会議についてはしないですね、そういうような団体をもっとちゃんと周知すべき、というのがまず必要なような気がする、現段階では。確かになにも知らない人たちからそういう人たちが集まっている…?…な意見をつけられては、少し問題があるというのは実状だということ。ただ天文学会については、

このようにいろいろな意見がでてくる場を用意してくれるのは非常にリベラルな場として非常に健全でよいなというような感じを受けました。

伊王野 はい、最後の質問です。

K 戸谷さん、後輩として、大変勇気をもった発言をしてくださって大変ありがとうございます。お礼申し上げます。当然すべてに賛成する必要は全然ない、非常に僕は共感するのですが、こういう意見が出ないことのほうが確かに全然おかしくて、こういう意見が出たので大変深く感謝申し上げます。

もうひとつは、僕自身の個人的な意見で言うと、防衛省の予算、科研費がある。もし予算が単純に増えるのであれば一向に構わないのですが、逆に減らされるのであれば困るというのが正直あって、そこはまたこれとは別にそういう側面があつていいのかなという気はします。やはり理念というのは大事で、軍事を理念に掲げている研究費と、科学を理念に掲げている研究費では、書きぶりが変わっているのは当然のことなので、そこらへんは私個人としては科研費のほうが、科研費のほうを増やしてくれたほうが全然うれしいということはずいと言いたいと思います。

一方でおっしゃるとおり、司馬遼太郎の言葉、裏返しのなんちゃらというのは非常に僕も感じる場所がありますので、ぜひそういうことがかかった議論ができる場がいいと思いますし、戸谷さんが非常に勇気をもってこの発言をしたことを後輩の一人として大変御礼を申し上げます、ありがとうございます。

戸谷 ありがとうございます。恐縮でございます。今の話でいうと、確かに実際軍事研究の防衛省の予算が増えて、基礎科学の科学の予算が減ったら困ると、それはまったくその通りなのですが、でもそうなったらそれは、われわれは基礎科学の予算を減らさないでくれということをアピールすべきなのであって、それを恐れて初めから防衛省の予算を一切出すなと全員に強制するというのは、僕はまったくオーバーリアクションというか、間違った判断だと私は思っています。

伊王野 それでは戸谷先生、どうもありがとうございました。

(拍手)

それではコミュニティの意見の最後ですけれども、総合研究大学院大学・名古屋大学名誉教授の池内先生、よろしく願いいたします。

池内 私が天文学からドロップアウトしてからもう 10 年以上になりますので、今悪口を言われたシニアの先生、偉い先生とはいえないとは思いますが、シニアのなんか独善的

な立場の人間とみられているのかもしれませんが、私自身のきょうの議論は、先ほどの学術会議に対する議論はかなり一方的であり、私自身としてはほとんど同意できない部分がたくさんあって、たとえば学術会議の特定の見解を押し付けてなんていうのは、押し付けているわけでは全然ないですね。議論をしましょうということをむしろ言っているわけで、そういうことも含めて、議論というよりは、私自身の考え方・見方をどうせ短い時間ですから示させていただきたいと思います。

今やり玉にあがった、軍事的安全保障研究に関する声明が昨年 3 月に出たわけですが、私がここで議論をするのはね、彼が特に強調した学問の自由ということを表に出して、すべて各々が勝手にやればいいんじゃないのと。なんか、ある特定の意見を押し付ける、あるいは特定の意見のとおり動かなければいけないというような決め方はおかしいのではないかという議論であったと思うのですが、まさにそうなのです。しかしそのときに、学問の自由があるからそれはおかしいという論理なのですが、じっくり考えてみたときに学問の自由というのはいったいなんのための、あるいはなんであるのかということを考えてみる必要があるわけですね。

この声明で、学問の自由および学術の健全な発展と緊張関係、現代はそういう緊張関係にある。これがあるからこそ、このセッションが生まれたわけですが、科学コミュニティ、つまり天文学会あるいは大学、研究機関が追及すべきは、なによりも学術の健全な発展であり、それを通じて社会からの負託に応えることである、ということがわれわれの、学問をやる人間にとって必要なことではないでしょうかというように問いかけているわけですね。これは決して政治的な発言ではないわけです。学問そのものが国民から負託されているという現状を認識し、だからその意味で学問の自由ということの中味を検討したときに、ここで特に取り上げられている学問の自由というのは、研究の自主性・自律性・研究成果の公開性が担保されている。つまりそれがきちんと保障されているということですね。これが学問の自由の一つです。

それからもうひとつ重要な側面は、研究の方向性や秘密性の保持をめぐって、政府、あるいは権力による研究活動への介入がないこと。これが学問の自由ということの本質である。要するに介入されない、介入されずに自由に私たちが研究活動を続けていくことができるということがまさに研究の自由なんですね。だから学問の自由というのは、実は第二次世界大戦後に日本においては獲得された概念である。実は日本は戦前には研究の自由はなかったんですね。国家の要請によって、政府が学問研究に介入することは当然とされた

わけです。だから国が研究者の各研究テーマを全部調べ上げて、そこで特に軍事研究に重要であると思われるのをピックアップして、そこに集中的にお金を回すなんていうことは平気でやったんですね。まさに学問への権力の介入が当然であった。これは本当にいいことなのかということをお願いしているわけですね。問いかけるべきなんですね。

日本国憲法では、この憲法が国民に保障する自由および権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない、あるいは、又、国民はこれを濫用してはならないのであって、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負うというように言っているわけですね。それでたとえば、それがまず大前提であって、つまりこういう精神のもとでなにないの自由を保障するというように憲法は書かれているということですね。

そこで 21 条で、そのあとで、たとえば表現の自由にかかわること、そして 23 条で学問の自由にかかわることが書かれているわけですね。ですから、まず大前提として、自由の概念ということをもう一度考え直そうということですね。

安全保障技術研究推進制度の問題点、これはいろいろ言われていますが、私自身がここで取り上げるのは今の研究の自由の問題との絡みでいいますと、要するに防衛省はわざわざ学振と同じ競争的資金をつくるはずがない。これは誰が考えてもそうでしょう。防衛省は防衛省の意図があるわけですよ。そして、もともとその意図は将来の防衛装備品の開発に生かすということがまず大前提。これを軍事的安全保障研究というように日本学術会議の声明では呼んだわけですが、ありていに言えば軍事研究ですね。

防衛装備品というのが防衛省の言い方ですが、防衛省の文書によれば、武器あるいは武器に関わる技術を防衛装備品と呼んでいるそうです。そのような技術研究というのは当然、軍事機密となる可能性が高い。これは当然そう考えられるわけですね。しかしながら現在の制度はまだ 2015 年に発足してからまる 4 年しかたっていませんから、制度が定着するまでは公開を保証し、プログラムオフィサー (PO)、プログラムオフィサーとはそばに防衛省の役人が常に一人配置されるわけですが、その干渉は控えるであろう。研究者がこの資金に頼らざるを得ない状況になれば、運用は変わるであろう。まさしく防衛省が持っている意図というのはその段階で現れるであろうということですね。つまり軍事研究、あるいは私たちは軍学共同と呼んでいますが、軍と学が共同してある装置開発を行っていく。それは当然であろう。要するに研究者はこの資金が当然われわれは使えるものだと思って、そしてその研究が当たり前のこととして定着してしまうと当然ながら防衛省は防衛省なりの方針で物事を進めていくであろう。

もっとも 100%すべて防衛装備品に使うわけではないとは思いますが。しかしどれがどのように使われるかは私たちが決められることではないということですね。

そのような時代の研究者の意識はどうなるのだろうかと考えてみたときに、私自身は学問の原点を忘れるっていうのはこれすぐあとにやります。もっぱら軍事開発を考えるようになるというように頭の構造が変わっていくということが一番心配であります。研究者のかなりの人数がそのような頭の構造になっていくということですね。というのは、私たちは、たとえばある競争的資金なんかで、なにかある目標があった競争的資金に応募するときは、それを落ちた場合にどうするかというと、どこで落ちたか、なぜ落ちたのかと検討するでしょう。そうするとより相手がどういう意図で募集しているかということも当然考えるわけですね。その意図を忖度する、つまりその意図に合うような形で次の研究計画をつくっていくだろうと。そういう頭の構造が変わっていくわけですね。つまり軍事研究というのは、もともと出発点としてはあんまり大したものではないような形で出発しても、研究者のいわゆる同調意識というのかな、そういうものが当然働くようになっていく。それによって私たちは知らない間に、軍事研究そのものが当たり前になっていく。そのときに、もはやそのお金はやばいから止めようというわけにはいかなくなる、というわけですね。もう足抜きができなくなる。

だから大学等で軍事研究が本格化する前にやはりそれはつぶしておく必要があるというように私は考えております。これはつまり、政治的な意見ではなくて、学問の自由ということをもとに考えれば、そうなるのではないかということですね。安易に「学問の自由」ということを主張することが、かえって学問の自由を損ねる。まさにパラドックスが生じる。学問の自由と言って、各個人がバラバラにやっておるということによって、結果的には学問の自由が阻害されていくという状況が生まれてくるというように思います。

再度憲法 12 条で、憲法が保障する自由というのは、不断の努力によってこれを保持する。乱用してはならない。公共の福祉のために利用する責任を負う。この三点に関して、われわれはどのように考えるか。学問の自由ということ、この三点に関してどのような意識で対応するのかということではないかと思えますね。だから軍事研究に対して、学問の自由ということで、だんだん許容していくということが結局のところ自主性・自律性・公開性の担保というのと権力の介入を招くという、この二つの事柄。私自身はこの二つの可能性をもっとも警戒すべき学問の自由に対する挑戦だと思います。それを招いていくとすれば、それは結局のところ学問の自由と言いながら学問の自由を壊す役割を果たすという

ことですね。

そうならないように心しておかなければ、先ほど日本学術会議は非常に特定の見解を押し付けているとか、そういうようにおっしゃったけれども、まず私自身は研究費を個人としてどう考えるのか、そして科学コミュニティとしてどう考えるのか、ということをやはり全体として考え直す、見直すということは当然必要であると思うわけです。

学問の自由もそうだし、軍事研究の問題も、ある意味ではこれは倫理の問題ですね。倫理的な側面です。倫理は法ではないわけです。したがって倫理を強制することはできない。これは当たり前ですね。しかし倫理的な議論は、倫理の背景にある考え方、ものの見方は、私たちは共有しておかねばならないというわけですね。

セクハラは法律には書いてないということを言った政治家がいるでしょ。それは法と倫理をわきまえていないんですね。法ではなかったら全部なにやってもいいんだということにつながる発想でしょう。だからそういう、まさに「学問の自由」論はそこに行き着く可能性は十分にあるということを私たちは押さえておく必要がある。

ということで、要するにまずは自己点検をする。学問研究に従事する者の原点として、誰のための研究であるか、なんのための研究であるか、ということを常に確認しているか。自分として確認しているかということですね。それから、そうすると自分がやろうとしていること、あるいはやっていることがその原点を踏み外していないかどうかを点検するということですね。

そして、ほかの国はそうやっているのだから、あいつがそうやっているのだから、というように他の研究者の動向には関係なくて、自分が自分としての選択の結果であるということちゃんと確認しているかと。この個人としての自己点検というのは、まさに倫理の問題です。自分自身が研究者としてどう生きるかということ。その原点を忘れては、単に学問を自分でもてあそぶだけになってしまうであろうというように私は恐れています。そしてそれを個人としてだけに閉じずに、科学コミュニティとして学問の自由の主張に伴う倫理の議論を行うということが必要ではないか。議論を行って。だからまさに天文学会でこれをやろうとしているのは、まさに議論を行うということであって、私は非常に重要であり、非常に意味があることだと思っております。

社会から負託された科学者としての社会的な責任ということ、常に客観的かつ集団的に点検するということが必要。要するに戸谷君は戸谷君で、自分でやってるよ、戦争はいやだとおっしゃるけれども、そういういろいろな考え方をほかの人間と議論するなかで鍛



えていく。あるいは自分の意見が間違っているかもしれない、考え直していく、あるいは自分の意見のほうが正しいということが分かるかもしれない。そのように集団的な議論をやる必要がある。要するに自己満足に陥ってはいけないということですね。

僕自身は、ここに座っている天文学の研究者あるいは研究者を志している大学院生の人もおられると思いますが、言わばここに集まっている人たちはエリートなんですね。社会的エリートです。天文学という誰もが憧れるような学問をやる機会に恵まれ、そういう条件を得られているわけですよ。そういう意味ではノブレス・オブリージュという言葉をご存じかもしれませんが、そういうエリート、ノブレス、要するに高い地位にあるという、ふつうはそういう意味ですが、要するに私たちは得難い立場にわれわれはなっている。そういう人間にはそれなりの義務がある、社会的義務があるということです。オブリージュですからね。だから研究の適切性について学術的な蓄積に基づいた科学者コミュニティが倫理規範を定め、コミュニティとしての自己規律を行うということは学問の自由を侵すものではない。学問の自由をむしろより中味を洗練されるというのか、？来往しない。あるいは自分として責任を持つということにつながるわけですね。だからむしろ学問の自由を確たるものにするというように考えるべきではないかと私は思っております。

科学者コミュニティが「倫理規範」を検討する必要性というのはまさにそういうことで、単に個人がいろいろ考え、そして集団として議論するだけではないし、さらにそれを規範として検討していく。検討するということがまず大事です。それを発表するかどうかは現実に規範として多くの人たちが従わなければならないかどうかは、それはまさにその社会を構成する人間が決めていくということです。

しかし、そういう方針は社会から注目されているということは事実でしょう。そして、たとえば京大とか名大が「軍事研究を行わない」という声明を出したということ自身が、まさに組織として、あるいは科学コミュニティとしての見識を示しているわけですね。あるいは社会的責任はどうであるかということをも自分たちが引き受ける覚悟をしているわけです。

だから組織としての動向や結果に対して説明責任を自分たちが負っているということも思うわけですね。だから科学コミュニティとして共通の目標、たとえば人権・平和・福祉・環境などそういう普遍的な価値に照らして、研究が本当に適切であるかどうか、そして自己規律を通してそれらの価値に実現を図っているかどうか、ということをも自分たちがお互いに議論するなかで明確にしていこうというわけです。

現実に、現在は大学や研究機関に対する社会からの圧力という言い方がいいのかどうか、私は圧力だと思っていますが、大学改革の圧力はほとんど次々とされているわけですね。そのなかで、たとえば科研費のテーマに対する攻撃もあったわけですね。学術の内容に対するテーマまで攻撃の対象になりつつある。そういう状況。それはまさしく大学等の研究がいかなるものであるべきかということを考えさせる問題ですね。それらの外圧に黙って従うのではなく、あるいは学問の自由があつて、各々が勝手勝手にやっていたらいいなというのではなくて、もしそれで皆さんの意見がバラバラである、あるいはもう面倒くさいから黙っておこう、様子見をする、という状況になると、結局学長等のトップダウンで決められてしまうことになるでしょう。そして科学コミュニティとしての見解あるいは見識を示すことができずに、結局大政翼賛になっていくでしょうね。それでいいのかな。その結果として、学問の自由は破壊されていくということになっていく。

だから学問の自由というのは天授、天から授かったものとか、神授、神から授かったものではないわけですよ。科学コミュニティに属する個人、あるいは研究者集団、あるいは組織が自覚した決意と行動で守らねば実は取り崩されていくということ、というように思っています。

だから日本学術会議のあの声明は、一方的に押し付けるものではむろんないと。それぞれが自分たちの考え方と照らし合わせながら議論していくべきものである。そのなかでどういう考え方、どういう責任をとっていくかということをも明確にしていこう、というのが科学コミュニティとしての重要な役割ではないかというように思っております。以上です。  
(拍手)

伊王野 それでは、池内先生の講演に対して質問等ありましたらお願いします。

L いろいろたぶん重要なことも含まれているお話だと理解しておりますが、正直ちょっと、なかで論理のすり替えがあるんじゃないかと。お話について一番気になったのは、先ほど戸谷さんが言われたとおりもあるんですけど、平和のために、「平和＝軍事研究禁止」というのが、たぶんこのなかで共有されているとは正直思えないということが一つあります。そこをすっ飛ばしてなんか議論されているかと僕は正直違和感を覚えました。

もうひとつは、学問の自由というものをどう解釈するかということなんですが、基本的に戦前に学問の自由がなかったというのは、予算配分が特定の分野にされたということとは違うと思うんですね。先ほどこういう研究をしたらいけないと、政府が禁止すると、いう側面はたぶん共産党なり社会主義の研究を禁止したというところが、やっぱり新しい

憲法で示されたという感じだと理解しておりますので、やはり僕としてはなぜ「軍事研究＝いきなり学問の自由の破壊」につながるのかということが正直納得できない、というか理解できないというほうが正しいですね。

僕としては次世代を考えたときに、軍事研究をまったく否定するというのはありえないのではないかと。先ほど戸谷さんが言われていましたけれど、われわれの平和というのは、なんだか言ってアメリカの軍事研究の上に成り立っているという側面が非常に強いと僕は理解しています。そういう社会のなかでどう生きていくか、国としてどう生きていくかというのは、やはりかなりの議論というか、政治的背景のなかでの戦いになってしまいます。難しいと思いますが、その前提条件をもういっぺんちゃんと見直していただかないと、なんとなく先ほどの戸谷さんと今の池内さんのお話は完全にすれ違っているように思っていて、ほとんどここでの議論にもならないんじゃないかというのが正直心配しているところです。

池内 まさしく政治的な議論に踏み込もうとしているわけですね、あなたはね。軍事研究そのものが、戦争と結びついているということは明確でしょ。

L はい、それは、僕はそう思っています。だからその戦争を、じゃあ軍事技術を否定したところで平和になるのかというのは一番重要ではないというように思ってますし。

池内 それは人々それぞれの考え方にしたがって議論すればいい。

L そうですよ。そうなるよ。

池内 私は私の立場でものを言っているわけです。

L そうすると、今の議論はずるいと思っていて、ユニバーサルの倫理という話をしながら政治的な話ということをするのがちょっと正直僕としては納得できないというところなんですね。

池内 いや、まさに世界の平和の論理をつくった、たとえばカントとかね、そういう人たちの議論を踏まえると、軍事力に依存するということの危険性ということを常にわれわれは意識しておかなければならない。そのなかで、私たちはどのように平和を形づくっていくかということを考えるのがまさに人間の役割である。

L はい、そうだと思います。

M 私は、学問の自由というのはもちろん大事だと思いますが、学問の自由というのは非常に一番重要なところに出てきて議論が進んでいるのに少し違和感がありました。というのは、学問の自由というのは、もちろん個々の人が個別の学問を追求する自由というの

は決して制限されるべきではないと思いますけれども、社会の側がその自由を積極的に公的資金の配分という形で支援するのであれば、それはより上位の目的である人々の幸福であったり、…?…であったり、それに資する考えであると思いますので、学会が社会的存在である以上、学問の自由を守るっていう以上の、われわれがどうすべきかという社会的責任を果たすべきだと思います。

そのうえで、戸谷さんの講演の学術会議批判にはちょっと共感することが大きいのですが、したくない人までが同意されたことのみが責務を果たすはずだというのは、ちょっと理解が浅すぎるようには思います。というのはその結果、したくない人がされただけではなくて、その研究がなにを引き起こすかということ、それほど深く考えずにコミットしてしまった、その結果として、非常に深刻な事件を招いてしまったということの反省が、それは日本だけではなくて、たとえばマンハッタン計画に対する反省であり、戦後にたとえば湯川さんが参加したパグウォッシュ会議みたいなものがでてきたのにもつながったんだと思いますので、そういう意味では「軍事研究＝平和」、イコールではないというのが、それにはすごく賛成なのですが、ただ、わりとナイーブに軍事研究を警戒する背景にはそれが一見合理的なロジックとか民主的なプロセスをとっていても、いつのまにか社会のダイナミクスで非常に危険なことにつながってしまうという、なんていうか、自分たちの社会の理性に過信してはならないという、そういう戒めからきているのではないかと思うんですね。

一方で、軍事と平和の間に非常に複雑な原因は確かにあって、たとえば紛争地の停戦監視や平和維持軍など、そのことによって平和が成り立っていることはいっぱいあるということ、池内先生のご意見であるとか、学術会議の声明はあまりにも無視しすぎであると私も思います。そもそも天文学会の…?…は NG と言ったって、日本中や世界中で軍事研究は行われるわけなので、私個人としては、ある種の政治的メッセージとして天文学会が防衛省の予算を出すべきではないとか、NG ということはありだと思っています。ただしそれだけ、その宣言だけでは、自分の手を汚さないということだけであって、人類の幸福に資するという私たちの責務を果たしたことはない気がするんですね。なので、個人的には天文学会として防衛省の予算になんらかの抑制的な声明を出すことには賛成です。…?…はいいと思いますけれども。ただそれだけではなくて、なんらかの、天文学という学問が平和を支えている以上、単に私たちは軍事をやりませんというだけではなくて、もう少し具体的に自分たちの責務を果たすようなコミットメントを同時にすべきではない

かと思います。ただちょっと具体的に分かりませんが、たとえば紛争地だとか難民とか、避難民の方を対象にした奨学金制度の創設であったり、あるいはこういう議論の場をほかにも広げたりとか、そういう、単に「学」の研究をやるというのはどういう研究をやるのかやらないのか、それだけではなくて、私たちの学会として平和というものを構築するためにどういうことができるかということ、もう少し具体的なアクションとして学会として考えるのがいいのではないかと提案です。はい、すいません。

池内 今の提案は非常にプラス、有意義な提案で、現実に天文学会としてというよりは、天文学のこれまでの、たとえば東南アジア諸国に望遠鏡を贈る運動とかね、それからきょうもちょっと立ち話を聞いていたんですが、北朝鮮にも天文学を研究する人たちがいて、その人たちとはある種の連帯の活動をなにかやれないかというようなものとか、むろん、世界中いろいろ見ると、アゼルバイジャンとかいろいろな小さい国、こんな国に天文学があるのっていう。みんな苦労しながらやっているわけですよ。金のことなんてほとんど無いような国でもやっているわけですね。そういう人たちと、なんらかのかっこうでわれわれがつながっていくということ。それが社会の平和ということを築いていくための一つの重要なステップになると思います。だから日本天文学会としてやるべきことやれるようなことをいろいろ考えてみるというのは必要ではないかと思えますね。

N 池内さんの意見に深く同意します。ということ的前提として、少し付け足しをしたいと思えます。

たぶんここにいる方々の中には池内さんのことを邪推しすぎではないか、ちょっと言い過ぎではないか、考え過ぎではないのか、という人がいるかもしれませんが、われわれにとって本当に最悪なことが軍事研究しかしてはいけない、国に命令された軍事研究しかしてはいけない、というのが最悪だとすれば、今回防衛省の予算というのは本当の第1ステップ。全体が10ステップあったとすれば、たぶん第1ステップではないかと。まだまだ大丈夫だから、第3か第4ステップぐらいまでいったらちょっと注意すればいいかなと思っている人がいるのではないかと思うのです。ですが、こういうのって進み方がリニアじゃないんですよ。線形じゃないんですよ。ある意味不安定性みたいなもので、ちょっと進むと限りなくエクスポネンシャルに進む。というのは昭和の、戦前、戦中の日本をみているとそういうのがよく分かりますよね。最近の日本の社会情勢を見てもそういうのがよく分かります。なので、科研費をまだ削られていないのでまだ大丈夫だとか、そういうのが削られるようになったら注意しなければいけないというのはちょっと

純朴すぎるというか、純粹すぎるのかと思います。

○ そこに学問の自由という言葉が出ていますが、戸谷さんの話も軍事研究という言葉があつて、ちょっと注意して議論したほうがいいと思いますが、私の体験から言いますと、アメリカで研究している時に、シカゴ大学の先生で…？…、高名な先生です。たぶん池内さんもお存じの方だと思いますが、食事の時に少し社会のことを話したんですが、大学で核兵器の講義をしているということで核兵器の研究をしているんですね。大学で核兵器のことを教えていて、核兵器というのはどんどん放射性、どんどん崩壊していきますよね。維持するのがすごく大変なんですってね。同じレベルでずっと維持する、ずっと、もちろんどんどん崩壊していきますから。そういうことを私まったく知らなくて、核兵器についてなにも知らないんだと。その先生は大学で核兵器の授業をしていると。それでシカゴ大学の学生が学ぶと。これは本当にすばらしい大事な授業で、もちろん学問の自由でありますね。その学問の自由で核兵器のことを研究して、大学で教えると。それを軍事研究というかどうかですね。

それを軍事研究といいますか。言うかもしれません、核兵器の研究。でもわれわれ核兵器についてまったく無知ですし、日本の大学の中でそういった核兵器の講義ができる先生はゼロではないでしょうか。ですから学問の自由というものと軍事研究というものは決して相対するものではなくて、もし天文学会で軍事研究なんか、っていう声明を出すのならば軍事研究とはなにかをもっと慎重に、本当に人を攻撃する、人を殺すものなのか、守るものか、非常に難しいですけども、たとえば核兵器の研究というのは核兵器が世の中にありますから、核兵器がどうやって維持していくか、そのためにはどうするのか、それをちゃんとわれわれ物理学を学んでいる人間はきちんと学んで、それを研究するということはとても大事だと思います。

おそらく池内さんも学問の自由のところで核兵器の研究は禁止とはいいませんよね。やはり兵器の研究も大事だと思います。ですから軍事研究がいけないというときには、ちょっとなにが軍事研究か、そこは本当にいろいろな世の中にミサイルなんてありますよね。そういうミサイルがどうやって落ちてくるのか、われわれ宇宙のことをやっていますから、そういう本当に研究というのは人を殺すためではなくて、既にある兵器がどのようなものか、それがどのような影響を及ぼすか、そういうことも研究で、そのようなことも軍事研究として禁止するというのはおかしいと思うので、もし学問の自由ということで軍事研究、そこが相対するものではなくて、もうちょっと慎重に議論を進めたらいいかと思います。

池内 核兵器の研究を講義するのはなんにも軍事研究と私は言っておりません。それは科学の事実としてこういうことを講義する。問題はそれを、たとえば核兵器をより豊かなものにする、よりすごいものにする。そういうことについてもっばら研究を行って、そのためにいろいろお金を取っていく。そういうことが軍事研究なんですよ。むしろ現在、さまざまな問題、デュアルユースという言い方されているでしょ。二通りの使い方があるわけですよ、現実にはね。核兵器そのものは、僕は絶対悪だと思います。それ自身が現実にあるという状況においては、その中身を、特に物理学の人間は知っておく必要があるわけですよ。それがいかなるものであるか、そして私自身としては、それはなぜそういう悲惨な兵器を止めなければならないのかということまで議論するということが本来的な平和につながる教育であると思っています。

しかしそれは各個人がどのような立場でやっていくかは別として、一般論的に核兵器の問題を議論したら軍事研究だというように私はそんなに短絡はしていませんよ。それは当然そうですよ。

P 非常に参考になるお話をありがとうございました。池内先生のお話のなかで、国家からの要請という言葉と社会からの負託というのがあったかと思いますが、われわれ研究者はそこを悩む。おそらく池内先生のなかでは国家からの要請というのはちょっとネガティブなイメージ、国家はもちろん政府・内閣だと思いますが。社会からというのはボトムアップの、近所の皆さんからの負託かもしれません。それはいいポジティブなものかもしれません。あともうひとつ、ノブレス・オブリージュというのは、これ場合によっては社会によって違ってくる、社会がひょっとしたら多少間違っているときでもわれわれはそこを正しい道を示さないといけない。信じきっている人を正さないといけない。たとえば宗教というのもそうなるかもしれません。われわれちょっと前にはオウム真理教という事件がありましたし、科学に反するようなことがあって。

ちょっと話を戻しますと、池内先生の中で、国家と社会、私たちにとってはその人たちからお願いをされて研究しているという部分と、自分が好きなことをやっているという部分、二つあるのですが、税金を使っているのでやはり社会からの負託というのは。だけど今、日本は民主国家ですから選挙で政府が選ばれているわけです。その線引きというのをある程度明確もしくは説明していただけるとすごく納得しやすいかなと。

池内 国家というか政府ですよ。現実には現在政治権力を握っている政府、日本は一強時代になってなかなか変わりそうにないのだけれども、まさに民主的な選挙によって選ば

れて交代していくわけですね。その交代した時々において意見は変わり得る。どんどん変わっていく可能性はあるわけです。

ここで私が一般に社会と言っている、要するに納税者である、だから政府が金を配っているのだから政府からわれわれはお金をもらっているわけじゃなくて、基本的には社会の納税者からの税金をわれわれは使わせてもらっているわけですね。ですから政府そのものが金を現実に握っているように見えるけれども、政府は政府の考え方で使い方を決めている。だから政府が変われば使い方も本来的には変わっていくことである。それに対して社会の、特に私が言う社会からの負託という場合には、科学研究という金儲けにもならないようなことを皆さんやっていただくということをわれわれは負託されているわけですよ。社会の税金を使ってわれわれが研究させてもらっているというね、その付託そのものは、いかなる時代になっても変わらないのだろう。つまりそれはなんのための、誰のための研究ということを考えたときに、やはり世界の平和のためとか人類の幸福のためという普遍的な価値を求めた科学研究であるからこそ、社会は税金を使わせ、負託しているんだ。という意味で私自身は意見が変わり得る政府そのものよりも社会的な信頼関係、契約関係に基づいた負託ということを重視する必要があるというように私は思っている。線引きはここです。

伊王野 それでは最後の質問です。

Q ちょっとあまり難しいことは言えないのですが、割合身近なことを二つ言いたいのです。最初の一つは、私は地方大学でほとんど研究費がゼロです。研究室に大学の交付金でくるお金はゼロになって、大学に資金を取ってこいということをすごく言われていて、しかも、私は理学部で、理学部全体にくるお金がすごく少なくて、節電のために夜 8 時以降は研究するなというような感じで、放り出されたりしている状態で、とにかく外部資金を取ってこいという圧力がすごく…?…状態で、今追い込まれていて、特に実験系の人は研究が非常に難しいという状況に追い込まれているんですね。

そのなかでさらに最近重なって、たぶんどこの大学でも同じだと思いますが、海外との交流で…?…の人と研究交流をやる場合は、誰と会ったかを全部報告しなさいという、たいがい。たとえば国際会議だったら、…?…国から誰が来たかをちゃんと報告しなさいとか、そういうのが報告書を出すのが義務づけられています。そういう状況であると、すごく感じているのは倫理観のバランスを崩す、結構直前までいっているんじゃないかというのが非常に心配で、それを肌で感じるというのが一つです。



二つ目は社会貢献に関してですが、私たまたまその…?…を通して、宇宙のこととかを市民に伝えるような活動を、社会貢献する。地域の人たちに科学のことを伝える活動をしてきて、今までは大学からいろいろ多少資金をいただいていたので、もちろんそれは当然今の状況ではゼロになり、しかも社会貢献をやったらむしろお金を取ってこいと、今はそういうような言い方で、社会貢献のためにお金を出すのではなく、誰かからお金を貰ってこいと、講座を開いてお金を取ると。税金の二重取りみたいなかんじがするのですが、お金を取ってきて、社会貢献にはお金は一切出さないという方針になっています。

今は NPO 法人で市民と一緒に活動しているのですが、市民の目から見るとそれに対して社会貢献を一切大学はしないという方針の大学を見たときに、市民からは研究者がどう見えるかという、研究者は自分の好きなことができればいいので、実は市民のほうを見ていない。自分勝手なお坊ちゃまだね、というようにしか見えない。研究者はなにもしないわけですね。社会貢献を向けられても少しは大学から出そうよという意見が大学からも出てこないのを見て市民は落胆するというような状況です。その二つは、ちょっと今池内さんの話と関係した、現実を感じていることです。

池内 さっき言われた倫理のバランスが壊れかかっているという。これはまさにそうだと思うんですね。今、日本の社会状況そのものが、そのような傾向がどんどん強まっていると。それをどう食い止めるかとか、それはまさしく個人個人がどのように自分の立場を決めて、自分の意見を出していくかということにかかっているとは思いますが、同時に科学者、研究者とすれば、研究者の集団、あるいは横のつながりをつくってお互いにわれわれはどのような生き方があるのか、どのような今後展開がわれわれにとって必要なのかということを議論する場、そして叶うならば実践する場ということをつくっていただきたいというように思います。

それはまさに大事な問題で、市民の顔を見ていない、市民のほうを向いていない研究者というものではなくて、市民とどのように結合した活動が本当にわれわれにとって必要なのか。

そしてたとえば NPO などで今クラウドファンディングというのがよくあるでしょ。これは市民からの寄付なんですよ。クラウドファンディングのためにはどのようなことをやるかというのが明確に出す必要があって、それに寄附を募るわけです。その場合、それはまさしく市民たちが求めている社会的な活動。大学の先生に求めている。われわれとしても、こういうことだったらできる、こういうことをやってみたい、ということをお互いに

すり合わせる機会になるわけですね。

ですからそのようなつながりをつくりながら、ファンディングということも、これは市民にもっと知ってもらう必要がむしろあるわけですね。勝手なことをやって、金がないし、ということが明確に、常に市民の人とすり合わせながら。それはまさしくクラウドファンディングなんかでお互いに、ファンディングになると特に具体的な展開ができるのではないかと思います。そのファンディングが成功するかどうかは別ですよ。このようなやり方で市民との意見のすり合わせということがいろいろ可能なのではないかと。市民に顔を向けた活動ということも可能ではないかというように私は思います。これは一つの意見です。

伊王野 それでは池内先生、どうもありがとうございました。

(拍手)

では時間がだいぶ押していますが、総合討論に移りたいと思います。最初に今後の進め方について、日本天文学会会長の柴田先生、よろしく願いいたします。

柴田 講演者の皆さま、素晴らしい講演をありがとうございました。

いろいろな方面から多様な意見を、皆さん本当に大事な議論をしていただいたと思います。私、先ほど戸谷さんの講演のあとでも言いましたけれど、声を上げない、議論をしない、というのが一番私の恐れる未来ですね。ですからぜひこのような議論を続けて、天文学のコミュニティとしての社会的責任を果たすような、なんらかのメッセージを社会に出したいと。会長任期の間に決めなければいかんとはなんちゅうことやという指摘がありましたけれど、これは私の責任を果たせる範囲で、無責任に未来に放置してはいけないと私は思っていますので、私ができる範囲で最善の努力をしたいということでそういうスケジュールを皆さんに提案しています。

まずこういう方向性ですね。これに関して皆さんどう思われるか。ご意見をいただきたいのですが時間あるでしょうか。

R 声明に対する賛否とか、投票とか、そういうのは。

柴田 先ほど戸谷さんもおっしゃいましたが、戸谷さんのご意見は個人的に聞いていたので、実は学会員にアンケートを取ろうと。まさにね、若手の会がアンケートを取っているのに天文学会が会員にアンケートを取らないのは片手落ちだと、それはまったくそのとおりだと思います。それで、それをきのうの夜に実務理事会でたたき台を議論しまして、きょうこれが終わったら理事会を開きます。そこで理事会で読んでいただいて、あし

た代議員総会がありますので、そこで最終的に代議員の方々に見ていただいて、そこでOKができれば直ちにアンケートを発信します。

それで1カ月ぐらいオープンにして、それに基づいて10月、11月にワーキンググループを開き、12月22日に会員全体集会。これはちょっと私がいるところの京大で申し訳ないのですが、理論天文学懇談会のシンポジウムが確か基礎物理学研究所であるんですね。その直後であれば、それなりの方々が京大に来ておられるので、もちろん今の時代はテレビ会議で全国からつながるわけですけども、それで全体集会を開きまして、もちろんワーキンググループでかなり詰めたと思います。それに基づいて来年の1月に理事会、代議員総会を開きまして、またワーキンググループを開いて、3月の特別セッション、理事会、代議員総会で最終的に発信をするという方向性ですね。ですからこれから1カ月アンケートを取って、それが出発になります。

S たびたびすみません。それでもたとえばアンケートを取って、たとえばどのような結果であったのか、どうだったのか、たとえば過半数だったら、それは学会全体の賛成とみなして出していくのか、それとも先ほど戸谷さんがおっしゃったように。

柴田 だからそれはワーキンググループでしっかり、そんな単なる賛成、反対とかいうそういうメッセージを私は出したいとは思いません。やはり天文学のコミュニティが天文学の分野ではこの問題に対してどう考えているのか。さらにもっと重要なことはいくらかもあるわけですね。そういう発信をしたいと。

S いや、その声明を出すということ自体も決定なんですか、じゃあ。

柴田 いやいや、だからそれを皆さんに諮っているわけです。こういう方向性でね。天文学会っていうのは、やはり理事会があつて、代議員総会があつて、そこでオフィシャルのことは決まっていきますから、ここで皆さんがこんなのをやってもナンセンスだという意見が強ければ、次にこれからやる理事会でそれは止めたほうがいいでしょうということになれば、なって、あしたからの代議員総会でもこれはもうこれで終わらしましようとなれば、やるわけにはいきませんよね。今、そういうプロセスにいます。ですから今発言していただくのは極めて重要です。

T 個人的に危惧するのは、たとえば偉い先生というか。

柴田 さらにいいますと、やっぱり戸谷さんがこのワーキンググループをまず選ぶところからちゃんと考えなきゃいけないのではないかと。それも非常にもっともな意見で、私は戸谷さんにぜひ入っていただきたいと思います。(笑)

いかがでしょう。

T あんまり安易な声明というのは、個人的には。

柴田 もちろんです。もちろんです。

T …？…僕は思っているのですが。

柴田 これはね、しかし私はとにかく、強調して、戸谷君と同じようなぐらい覚悟を決めてここに望んでいるわけですね。学者生命を失うかもしれない。しかしそれぐらい重要なことなので、今皆さんにこう言っているわけです。

T すいません、確認したいのですが、その声明はどのぐらいわれわれ会員は縛られるんですか。

柴田 全然縛られません。

T 縛られないものを。

柴田 天文学会はそういうような機関ではありません。大学であつたら、たとえば科研費を出そうと思つたら大学の承認、学長の承認が要りますけれど。これは学会ですから。しかしこれは見識を明らかにすること。われわれは社会に対して責任を持っているわけですね。それをやりましょうと。

T ……はい。(笑)

T たとえば声明に学会員全員の意見だということに誤解されないような。

柴田 はい、それはもちろん、そこは、こういうことはいっぱいあると思いますから、もちろん皆さんにもお知らせすると同時に、できるだけ多くの人がこれだったら納得できますねというような方向にもっていきたいと思いますけれども、しかしとにかくこれはやってみないと分からないですね。やる前からこんな難しいことやるべきではないという人がいるんですけど、僕はそういう意見には賛成できない。困難であるからこそやるべきであると。その過程が大事。もちろん最後の結果も大事なんですけれど、それはやってみないと分かりません。

U 質問なんですけれど、その声明なんかできたあとに会員全体にこの声明案でいいかどうかというアンケートとかはやる予定はありますか。

柴田 はい。このスケジュールを見てください。代議員総会というのは、まさに代議員は会員の代表としてそこに参加している。これは今の日本の民主政治と同じようなやり方ですね。そこで責任を持つ。しかしそれだけでは不十分なので会員全体集会というのをできるだけ入れたい。これは別にこれは決まったわけではないですよ。もっとやってほしい

ことがあれば、それは可能な限り開きたいと思います。

U アンケートを、一つの声明にまとめるその可能性というのはいろいろな可能性があつて、もちろん…?…と思うんですけど。

柴田 いろいろ可能性があると思いますが、今はまだなにも決まってないので。しかしとにかくこういうのを議論するのが鬱陶しい、嫌だ、っていう人が多ければこれは成り立たないと思いますが、それは恐ろしい未来だと私は思います。

U 一個人としての提案なんですけれど、最終的にそういう声明でいいかというアンケートがあつたほうがいいかなと思います。

柴田 はい、分かりました。

V 先ほど声明を出すかどうかでもアンケート取る可能性の話でしたけれど、その結果次第ではこのスケジュールは変わるんですか。別になにも決まってないのにスケジュールが決まっているっていうのはおかしいと思うのですが。

柴田 はい、変わり得ると思います。はい? まだ非常に流動的です。

W いままで天文学会で出された声明はいくつかとか、あとその決定プロセスというのがもし分かるとうれしいなと思ったのと、たぶんおそらく用意されていないのではないかなと思います。

柴田 基本は同じようなプロセスです。

W このようになんかなり民主的にやられているんですか。

X 民主的。(笑)

W わざわざそう思うような、アンケートまで取るような。

柴田 天文学会の運営は、基本的に理事会があつて、代議員総会が。昔は代議員総会のシステムではなかったので、天文学会の全体集会が総会になったんですけどね。

X アンケートとかいうようなものは。

柴田 いやいや、もちろんあつたと思います。

Y その件なんですけれど、実は震災直後、2011年ですね。34学会合同声明というのを実は出しております。実はですね、理事会の独断で、あの私が…?…けれども。理事会のほうが独断に近い形で出してしまったということを僕は記憶しています。

Z 会長声明?

Y いや、一応34学会声明という。

AA 会長声明です。

Y 会長声明なんですけれども。

AA 会長声明でした。

BB たぶんおそらく今までの声明というのは基本的に外向きの声明だと思うんですね。要望とか。なので、基本的には要求で、コミュニティ全体の平和になる、幸せになるんだろうという声明だったと思うので簡単に合意が取れると思いますが、次の声明というのはおそらく内向けに対する声明だと、

柴田 いやいや、社会に対する外向けの声明でもありますよ。

CC でも外へのアピールではあるんですけども、コミュニティ全体に対するわれわれはこうありたいという、こうありたいというか、そういうものになると思うんですね。なにか要望するわけではないので、そのへんのプロセスでたぶんいままでと違うことになるのではないかと。

柴田 どのように議論していくかというのは、おっしゃるとおりすごく大事で、ただ私は議論していく過程で皆さんにいろいろ考えていただきたいと。私自身も会長になって、この問題を考えだして、いろいろ学んだことはいっぱいありますから。

DD 声明というもののスコープが結構難しいかなと思うんですけど。この問題自体すごくいろいろな深い問題があって、究極的には予算を配分される科学者がどのようにそれに応えるかという、予算の配分の主体とわれわれ自身の関係というところになると思うんですけど、そういうレベルでこの声明にするとしたら、それはすごく抽象的になってしまいがちになる可能性だって。たとえば過去にある総合技術科学会議での声明文を見ればそれに近いかもしれないんですけど、2003 年に出されていますけれど。そういうもので出すのか、それとももっと絞った部分に声明を出すのか、そのあたりのプランというのはいかがでしょうか。

柴田 とにかく、声明のたたき台をつくるワーキンググループというのはこれからメンバーを、皆さんの意見も考慮して、理事会で議論して、あしたの代議員総会でメンバーそのものを決めようと思っっていますが、一応このセッションの世話人で、たとえば声明というのはどんなことになりそうなのだろうかというような議論をちょっとしたんですね。これはあくまで。

たとえば今の世話人で考えたら、みんながある程度まとまりそうな内容をこんなことかなと、ちょっと今項目をリストアップしましたけれど、別にこれはあくまでも一つの案にしかすぎなくて、そう思っただけであればいいです。とにかく天文学のコミュニティとし

ては、この問題に対してどう考えているか。この根っこは科学技術会議でも言っていたように、基礎科学に対する研究費はどんどん減っていると。その現状の裏返しなわけですね。そこらへんを、私個人はね、そういうことをやっぱり発信するのが次世代に対する大きな責任ではないかと思っていますので、そういうものにできればいいなと個人的には思っていますけど、ただこれは皆さんの考え方次第です。

(ここで、世話人会の声明項目リスト案(以下)を見せる：

声明をまとめるにあたって議論すべき項目(案)

前提

天文学会として意識している問題点は何かを前面に出すべきである。

一般社会(市民)に理解してもらえるように発信する

多様な意見があることを発信する。

天文学は最先端の科学技術を利用しているため、安全保障技術研究推進制度に関係する

歴史的な反省も含める(表現工夫)

内容

問題 基礎科学に関する研究費(運交金、公費)の減少

懸念事項 自由な研究の妨げ(テーマの選定、結果の公表、研究倫理)

天文学の特徴(国際協力、大型装置)

科学の発展を利用していかに平和な世界を築いていくか)

EE 多様な意見があることを発信するとか、基礎研究の資金の減少とか、われわれ全員が明確に共有できるものを前面に出してくださるというお話を聞いて非常に安心しました。というか大事なかなと思います。逆にいうと僕がどういうわけかそういう流れがみえなかったのが、皆さんの意見の発出を妨げていたのかなという気がしていますので、今この文言が、試案だと思いますが、会長がそのように発信してくだっただことが非常に重要なかなと思います。ありがとうございます。

柴田 はい、どうもありがとうございました。もう時間ということなので、ここで私の。

FF 私もこれを見てすごく安心しました。戸谷さんの講演にあったとおり、やはり全会一致を目指す。どこに着地できるかというようなところをすごく気にしていたのですが、

やはりイエスかノーかということよりもっと大事なことがたぶん問題としてあるので、そこに行こうとしているようなことがすごくあるので、すごく安心しました。ありがとうございました。

柴田 はい、どうも皆さん、ありがとうございました。

(拍手)

伊王野 それでは最後のあいさつといたしまして、日本学術会議連携会員の林先生、よろしくお願ひいたします。

林 日本学術会議連携会員の林でございます。きょうは大変難しいお話ですけども、いろいろ多様性に富んだお話を聞かせていただきましてありがとうございます。

この「安全保障と天文学 2」という、今回開催されています会議は先ほど戸谷さんも確かおっしゃっていましたが日本学術会議と共催ですね。正式に共催されている会議でございます、日本学術会議のほうで出しました声明、あの声明は別に個人を縛るものではないのですが、学協会等にはなんらかの指針をできればお願いしたいという形で、ある意味、学協会、それから機関に投げている形ではあります。そういうところにはなかなか学術会議自信の苦しみというのものもあるわけでございますけれど、多くの学会が避けて通るなかで、日本天文学会があえて声明を出そうとおっしゃっていただいていることには非常に感謝申し上げますし、ぜひ総意に基づいた声明を出していただきたいと思っております。

きょうの話を聞いていまして、私自身も若い頃から今日に至るまで、世の中が徐々に変容していくのを経験してきたわけで、世の中とはこのように変わっていくものかと年を取ってようやく分かる、あるいは分かってないのかもしれませんが、分かってきた気がします。

大きな話はいろいろあるのですが、一つ学術会議はけしからんという話がありました。学術会議会員としては一言反論だけぐらいはしておかないといけないかなと思ひまして。日本学術会議は日本国政府の内閣府の下に置かれています。にもかかわらず、わりと政府に反することをずっと言ってきました。おかげさまで予算は減らされるし、政府からはズタズタに切られるし、ということがさまざまありました。1980年代ですが、一時期本当に紛糾して大変だったことがあります。私はその頃、学者が政府に対して物事を言えるのはこの機関だけだと思ひまして、今、ナカイさんですね、今、関西大学に移られたのかな。ナカイさんとともに学術会議をどうしたらより有効なものにできるだろう



かと。当時まだ 25、6 歳ですよ。そんなのが、そんな偉い先生がいっぱいいる、学生がどうしようなんて、考えても動くはずがないことはよく分かっているのですが、少しいろいろ考えたことがありました。

一つびっくりしたのが、学術会議が権威のある機関だというように戸谷さんがおっしゃってしまっていて、なるほどそうかというように思いました。確かにある意味での権威はあるのかもしれませんが、それは学者の総意として日本国の政府に、政府の命令に「はい、そうですか」ということを言うことを聞いていくだけではなくて、先ほど池内さんの話のなかで、学者というのは、あれは池内さんのなかでノブレス・オブリージュと書いてありましたかね、それを持っている責任として、政府にものを言うていくという機関であるものであるわけですから、ある程度の力を持っている必要はあると私は思っています。

ただ学術会議のメンバーの選出に当たっては、昔から紛糾してきまして、その紛糾も学術会議が途中で混乱したさまざまな経緯を物語っているわけでございます。皆さんぜひ、学術会議を離れたものとは思わずに、なんていいますかね、自分たちの意見を政府に反映させるために積極的に関与していただければと思います。

本日は、学術会議と共催で日本天文学会、「安全保障と天文学 2」を開催していただきましてありがとうございます。感想としては、3 月に声明がどうなるか分かりませんが、私は今回の件で非常に思ったのは声明いかににかかわらず、ちょっとこの問題は少し腰を据えてよく議論していかなければいけないのではないかというのを、若い頃からこの変容していく世の中の考え方を見ていまして、常に気をつけてこのようなことを議論していかないと、しばらくいいと思ってほっておくとどうなるか、大変なことになるかもしれないということもありますので、たとえ声明がどのようになろうと天文学会としてぜひまたこのような議論を続けていっていただければというふうに思っております。

以上であります。どうも本日はありがとうございました。

(拍手)

伊王野 どうもありがとうございました。それでは本日のセッションを終了いたします。どうもありがとうございました。

(拍手)